

# うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 10



大正橋にある  
津波石碑  
大阪市大正区

## 大坂を襲った 津波被害を伝承

嘉永7年(1854年)12月23日、東海地方を襲った安政東海大地震の32時間後に安政南海大地震(M8.4)が発生。串本や土佐では、15・6メートルの津波が襲来したといわれていますが、大坂にも被害がおよびました。このころ、もうすでに32万都市になっていた大坂は、船を使って様々な物資を市内に運べるように堀が縦横に開かれていました。

津波は、紀伊水道を北上し、地震発生後2時間後に大阪湾に達し、安治川や木津川の河口から堀川をさかのぼりました。湾内に停泊していた何百隻もの船が小舟を押しつぶし、転覆して避難していた人が川に投げ出され、多くが犠牲になりました。また、道頓堀の大黒橋には、大小数百隻の船が重なって積み上がったといえます。



安政地震より150年前の宝永大地震(1707年)の津波でも500人が津波で犠牲になったのに、その教訓をいかすことができなかつたという苦い経験から、大正橋東詰広場に、この石碑が建てられました。そこに刻まれている碑文には、「毎年一回、石の文字が消えないように墨を入れて災害を伝承するように」と記されています。

(碑文「大地震両川口津浪記」)

## Culture Navi かるチャナビ

年も出会えうれしさと心が温まります。路地裏での行進では、小学生の子どもとの会話が弾み「えーっ！ずっと歩いてる？すごいなあ！」  
行進中にギター伴奏で歌う十八番の平和の歌は、「折り鶴」と「原爆許すまじ」の2曲。「空襲から逃れる時に子どもを見失ってしまい、気がふれたように探したけれど見つかることができなかつたおばさんのことを母親から聞いたことが心に残っている」と平和への強い思いを語ってくれました。平和の大切さを一歩一歩広げていきたいという思いの稲内さんです。



今年は腰を痛めて歩けなかつた稲内さん  
「来年は再びチャレンジします」

### 毎年同じ日に歩く平和行進 沿道からの声かけに元気が出ます

きます。この8日間の内のひと夜は、通し行進者の交流会に参加。新しい参加者の方との出会いと、今

## 平和の種まく人 <sup>10</sup> 九条の花を咲かせよう

稲内 一夫さん (大阪府職労)

退職したら、「平和行進の通し行進にチャレンジしたい」と以前から思いつつ、毎年府職労の綱の目コースを行進してきた稲内さん。定年退職の半年前の2008年の夏と2011年に大阪の通し行進に参加。柏原市から川西市までのコースを熱い盛りりの8日間歩

## いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

行水の 捨てどころなし 虫の声

上島 鬼貫 (俳諧師)

行水に使った水を捨てようとしても、あそこにもここにもいい声で虫が鳴いているので、水をすてる所がない。捨てれば、虫の音を止めてしまうからー「東の芭蕉・西の鬼貫」と称された上島鬼貫(1661~1738)は、兵庫県の有数の酒造業者の三男として生まれて25歳で医学を志して大坂に出ます。やがて仕官を求めて諸藩に出仕し、勘定職や京都留守居役を担当しました。



## 「キリマンジャロの雪」

タイトルからアメリカの文豪・ヘミングウェイの作品の映画化と勘違いしてはいけません。フランス・マルセイユの港町を舞台に、思わぬ犯罪に巻き込まれた熟年夫婦が失意や怒りを感じながらも、人に対する思いやりや助け合いの精神の重要性を示していくようすを描いたドラマです。

## 整理解雇の労組活動家夫婦の ハートフルな物語

世界的な不況はマルセイユの造船会社にも影響します。労組の委員長のミシエルはリストラのメンバーの中に自らも加わって失業します。ちょうど結婚30周年を迎えたミシエルと妻のマリクレールは、息子夫婦はじめ家族からアフリカ・キリマンジャロへの記念旅行のチケットをプレゼントされますが、出発を前にして強盗に押し入れられてしまいます。

1925年(大正14年)児童雑誌「コドモノクニ」11月号に掲載された北原白秋の作詞の童謡「あめふり」の一節です。歌詞中の「じゃのめ」とは和傘の一種である蛇の目傘のことですが、今では高級傘になっています。竹の骨に紙を張り、上端を中心に同心円状の模様(蛇の目)を施した日本独特の傘で元禄(1688~1704)のころから作られ、おもに僧侶や医師が用いました。

あめあめ ふれふれ かあさんが  
じゃのめで おむかえ うれしいな

北原 白秋